孤独な愛され女王蜂　7

孤独な愛され女王蜂　7

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19486996

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, ヨシ霊, ♡喘ぎ, オメガバース, もぶお兄さん×霊幻, 本番無し

誰得？俺得！なオメガバースパロです。オリジナル設定含みます。ヨシ霊ですがビッチ師匠総受けです。今回は本番無しです。♡喘ぎあり。倫理がまたもやアレ。お好きな方はお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

- 孤独な愛され女王蜂　７

孤独な愛され女王蜂　7

今日も今日とて男漁り、と。
俺は慣れた発展場のバーで、『オメガリリーフ』という薄白色のノンアルコールカクテルをちびちびと舐めていた。
なかなか引っかかってこない。有名な発展場だけあって、金曜日の今日はオメガ女性がウロウロしていた。これではオメガ男性には出番はないかもしれないな。
場所を変えるかな……。
「よっ、新隆ちゃんじゃん」
げっ。
「カンさん」
しょっぴかれたんじゃ、と余計なことをいいかけて黙る。
「今日も相手探してんの？今度こそ俺とどうよ」
「ごめん、俺、他に彼氏いるんだ。カンさんの趣味には合わないと思う」
ぱっとカクテルに手でフタをしながら断る。
「知ってるよ。いいからついてきなよ」

カウンターの下で、小型のライターのようなものを突きつけられる。

「……っ、分かった」
飛び出しナイフだ。カンさんは上手く身体でナイフを隠しながら、にこやかに俺を連行する。
「あっ」
誰か気が付いてくれ。祈りながらカクテルを倒す。
だがカクテルは俺とカンさんのズボンを少しだけ濡らして、虚しく床にこぼれていった。

※

目隠しをされて、手を縛られて車で連れ去られる。
「なあ、俺、警察にマークされてるから、やめた方がいいと思うぜ……っが！！」
ってー、殴られた。
「しゃべるな。……見え透いた嘘をつくなよ。なんでたかがオメガを警察がマークするんだよ」
嘲笑が車内に響く。
「しっかし男オメガっすかー。珍味でいいですね。さすがカンさん、いいの見つけてくる」
「だろ？そろそろ普通のオメガは抱き飽きてきてたんだよな〜。オイ感謝しろよ新隆ちゃん。その出来損ないオメガの身体、俺たちが有効に使ってやるから」
「……っ」
出来損ないオメガ。男性オメガに向けられる蔑称だ。男性オメガは女性オメガほど魅力的で無い上に、妊娠率が低いためにそう呼ばれる。
うるせぇな俺が１番良く知ってるよ、自分が中途半端な出来損ないだってことはさぁ……！
「ほら、今のうちに誘発剤、飲んどけよ」
「……っ！」
口に押し付けられたカプセルから、唇を閉じて必死に逃げる。
こんなやつらから飲まされる誘発剤なんて、何が混ざってるか分かったもんじゃない……！！
「ん！！」
鼻をつままれた。
……ぶはっ、だめだ、息が持たない！！
「あっぐ」
口にカプセルを入れられ、水を流し込まれる。
また鼻をつままれて、俺はごくりと飲み干した。……水だけを。
「ぷはっ、はっ、はぁっ」
「お口の中チェックしま〜す」
「んっ！」
タバコ臭い舌に口の中を探られ、ベロの下に隠していたふにゃけた

カプセルを探り当てられる。
「ん！ん！ん゛〜っ！！」
カンさんの舌にカプセルを喉奥に押し込まれ、水を口移しで流し込まれて、飲み込んでしまった……。
「げほっ、」
「はぁい、じきに気持ち良くなってきますからね〜♡」
揶揄うような声音が不快だ。
……っ♡
かぷせるなせいか、効きが早い……っ♡
「はい到着〜。ちゃっちゃと降りてね」
虫の声、藪の匂い、山奥か何処か……っ♡
「はぁ、うっ♡」
「ヤベ、エロい声出すじゃん。カンさん、俺が最初にヤッてもいいッスか？」
ヨシフさんがすり替えた、俺のネクタイピンは健在……っ♡
「あー？好きにしろよ」
目隠しが外されるっ♡だらしなく布団がいくつもひかれた部屋で、オメガ女性がアルファ男性に変わるがわる暴行されてる、
「やだっ♡あ、あぁっ♡」
吐き気がすんなぁっ♡ここはいわゆるオメガ窟、オメガをいたぶって楽しむために用意された部屋だ。
「お前はここだよ！」
「ぅあっ！♡」
布団の一つに蹴り飛ばされる。
あー、ヒートキッツ。あたまボーッとするわぁ……。
「ねぇっ♡はやくぅ、アルファチンポちょうだいっ♡」
目にハートを浮かべてアルファを煽れば、舌舐めずりしたアルファが慌てて俺のズボンと下着を下ろす。
「淫乱オメガめ、ぶち犯してやる……！」
「っあん♡」
ごめんなあ。
俺、実はヒートになっても、意識飛ばないんだわ。誘発剤乱用したせいで。

セックスん時はその方が楽しいから飛んでるフリするんだけどさぁ♡
さてと。
いっちょやるかぁ。
「来てっ、『俺のアルファ』♡」

ぶわ、とおそらく部屋中に俺のフェロモンが、言葉と共に広がった。

「あ……あ……俺の、俺のオメガ……」
ぶつぶつ言いながら目の前の男はズボンのベルトをかちゃかちゃ言わせている。俺のフェロモンがキマりすぎて、手が上手く動かないのだろう。
「どけっ、俺のオメガだ！」
「うるさいっ、おまえこそどけよ！俺のオメガだぞっ！」
擬似ラットに入った男たちが仲間割れを起こし始めた。
──よし、上手くいった♡
「あぁんっ♡はやくぅっ♡『来て、俺のアルファ』っ♡」
俺をめぐって気性の荒いアルファたちが殴り合いの喧嘩を始める。
「──どけ、俺のオメガだ」
カンさんがアルファたちを叩きのめして、血走った目で俺の足を持ち上げる。
「あぁ……っ♡」
さて、カンさんをどうすっかなー……♡
カンさんが俺を犯そうとした瞬間。
バタン！と扉が開いて。
「動くな！警察だ！」
ヨシフさんと数人の警察官が乗り込んできた。
はー、助かった……。
ドアが開いたせいで俺のフェロモンが薄まる。
カンさんははっと正気を取り戻し、さっと逃げ出した。
「１人逃げたぞ！追え！！」
ヨシフさんが部下に指示する。

床で伸びている下半身丸出しのアルファに手錠をかけたら、ヨシフさんは俺のところにすっ飛んできた。
「大丈夫か！？」
「……っん、へーき……♡」
ヨシフさんはフェロモンと闘いながら、俺に下着とズボンを履かせてくれる。
そのまま手を握って、背中を撫でてくれてるっ♡優しいっ♡
「ヨシフさん、『行って』」
でも今はっ♡俺に優しくするよりも大事なことがあるっ♡
「だが……」
「『行け、俺のアルファ』」
ふぅっと息をヨシフさんに吹きかける。
「……っ、分かった。だけど、何かあったらすぐ大声出せよ！」
立ち上がって走り出したヨシフさんに、俺は縛られた手を振る。
あ♡あ♡あ、ヒートっ♡結構来るっ♡
「身体、身体が熱いわ……」
「ちょうだい、それちょうだい……」
現場に残されたオメガたちが俺の男根目当てに這い寄ってくる。
「……お姫様たち、俺のフェロモンを吸うんだ。胸いっぱいに……そう、だんだん眠くなってきただろう？」
オメガ女性たちの動きがにぶくなる。
「花の匂いがする……」
「せせらぎ、川のせせらぎの香りだわ」
「いい匂い……」
「お休みお姫様たち……もう怖いことは何もない……」
ことり、ことりとオメガ女性たちは眠りについていく。
俺は裸の美女たちに囲まれて、１人グレースーツでヒートを耐えていた。

※

「助けるのが遅くなってすまなかった。いや、連れ去られた先が、まさかの他の内定先でな……連携に手間取った。本当にすまない」

も、そういうのいいからっ♡
俺、アルファ漁りに行きたいんだってばぁっ♡
「おかげさまで、お前の潔白が証明できそうだ。どうやらカンという男、オメガハーレムで釣って他のアルファを支配下に置いていたらしい」
あ、っそ……♡
「わ、かったからぁっ♡離してぇ……っ♡」
「……これからどうするんだ？大分辛いだろう、あの薬を盛られたんだとしたら」
「だから、アルファを漁りに……っ♡」
真剣な顔をしてヨシフさんが俺にカプセルを２つ渡す。
「本当は良くないんだが……警察で使ってる強力な抑制剤だ。飲め」
「そんなのいらな……っん♡」
……口移しで強引に飲まされた。
「……あの男に口付けられてるのを見て、妬いた。悪いな、勝手に」
別に、いいけどさぁ……♡
「ヒートがおさまったら、聞いて欲しい事がある」
なーに？♡
「……失いかけて、初めて自覚した」
だからなんだよ。

「好きだ、霊幻新隆。……恋愛感情という意味でだ。分かるか？」

いや、ちょっと……
「？」
何言ってるか分かんないですね……。

ほらみろ、後ろでヨシフさんの部下っぽい人がなんか取り落としちゃってんじゃん。それぐらいびっくりな話じゃん。

いやいやいや。

ヨシフさんに限って、それはないでしょう。

「何かとてつもなく失礼なこと考えてるだろう、お前。いいからとりあえず帰るぞ。後は任せた」

ヨシフさんは部下に声をかけてから、俺の手を取ってアパートに向かう。

完全にヒートが切れた俺は、でも大人しくヨシフさんに手を引かれて行った。

※

「まずは……怖かっただろ。大丈夫か」
は？
なんか抱き締めて背中ポンポンされてるんですけど？
「そんな、怖いわけ……ッ」
……ボロボロと涙が溢れてしまった。
「怖かったな。必ず俺が助けるから、これからは待っててくれ」
「ふぐ……うぇっ……」
俺は泣いている。
中学生の俺が、泣いている。
「む、昔、アルファに襲われて、」
「……うん」
「怖かった……！誰も助けてくれなかった……！」
「間に合わなくて悪かった。どこのどいつだ？」
「ちゅ、中学の先生で……っ逆らえなかった……っ！」
ぎゅ、とヨシフさんが抱き締めてくれる。
「それでいい。お前は賢いオメガだ。だから最善の判断をしたんだ」
「よしふさんん……っ」
「ヨシフでいい。……おそらく中学教師なら余罪がありそうだな」
ちょっと顔怖……。

「でも、それからは、自分の意思だ。俺は俺の意思でビッチやってんだよ」
「だろうな。お前ほど賢いなら、アルファを利用しようと思うはずだ。……これは差別発言かもしれないが、俺は霊幻がアルファじゃないのが不思議議だよ」
へら、と俺は笑う。褒め過ぎだろ。
ああ。
中学生の俺が、やっと心から笑えた気がする。
「ありがとな、ヨシフ。俺を好きだなんて嘘までついて、俺を助けてくれたんだろ？警官だから」
はぁー、とヨシフは大きなため息をつく。
「前も言ったけど、お前のその自己肯定感が低すぎるの、良くないと思うぞ。俺はただ単に、霊幻新隆という男が好きなんだ」
かぁぁっと顔が熱くなってくる。やめてくれよ、

両思いかも、なんて。

夢を見させないでくれ。
「相談所で過ごしてれば分かる。お前が本当に人が好きで、それの助けになりたい人間だってことが。それに相談所のメンバーも救われてる。俺だって短期間だったが、随分と気持ちが軽くなった。みんなお前を愛してるよ。お前だけがそれを理解していない。……それに」
よしよし、と宥めるように頭を撫でられる。
「プライベートでも仕事でも全てのバース性を救って、それじゃあどこでお前は救われるんだよ」
「そんな立派なもんじゃねぇよ、俺は……」
俺はそろりそろりとヨシフの背に手を回す。
「ただ俺に関わったやつが少しでも気が楽になってくれりゃ、それでいいんだ」
「聖人かよ」
くっくっとおかしそうにヨシフが笑う。
「……こんなビッチな聖人がいてたまるかよ」

「ちがいない。お前はただの人だ。だから泣いていいし、誰かに助けられていい」
あ、
また鼻の奥がツンとしてきた。
「『自分はビッチだ』。そう思わないとやっていけないような場面もいっぱいあったんだろ。悪いアルファもいっぱい居たんだろ。怖かったな。良く生き延びてくれた」
ヨシフは目を細める。
「これからはみんな俺にチクってくれ。片っ端からオメガ保護法に基づいて逮捕してやる」
ぶわ、と涙が出た。
「あんまり……優しくしないでくれ、ブサイクになる」
「気にするなよ。泣き顔もかわ……あー、悪くない」
ヨシフも素直じゃないよな。
俺たちお似合いかもしれないな。
「あー、ところで、返事は？」
「ん？」
なんだっけ？
「告白の返事だが」
俺はにっと笑う。
「ＯＫだ！セフレになろうぜ！」
「は？」
びきっとヨシフの額に青筋が浮かぶ。

「本命彼氏以外はお断りだ！！いいか、ひとつも、わずかにも、すこしでも、これっぽっちも、ナノレベルですら、セフレはお断りだからな！！」
「えー」

なら、仕方ないか。